

CONCOURS EDHEC 2022

ORAUX LANGUES

JAPONAIS

A large, solid pink triangle pointing towards the bottom right corner of the page.

Make an impact

コロナ世代 「青春」まで自^じ粛^{しゆく}させるな

コロナ下の大学生活を単純に「空白」とは呼びたくない。例えばオンライン講義は全学生が最前列に座ると同じで、通学の手間が省ける点も^{こうひょう}好評だ。人間関係に問題を抱えていた学生はいったんリセットできて喜んでいて、教員側の努力も大きい。私も人気ユーチューバーを研究し、講義の動画は事前に見てもらい、授業はチャットなど双方向の交流に使う工夫をした。

ただし、オンラインは万能ではない。友達との会話もなく、狭^{せま}い部屋にこもるのはストレスになる。学問は教師と学生の1対1ではなく、周りの学生がいて成り立つ。休み時間の雑談、部活やサークル、アルバイトでのつながりも消え、手厚いフォローが要る。

大学の役割は、「青春」まで自^じ粛^{しゆく}させないこと。社会からたたかれまいと自^じ粛^{しゆく}させ過ぎの面がある。大学は若者のコミュニティという居場所であり、人との接触が成長や^{きそく}帰属意識を生む。逆に対面式の復活が怖いと悩む学生もいる。

私のいる学部は昨年春の入学式の代わりに、2年生向けにキックオフイベントを^{かいさい}開催した。今年春には1年生約70人が、^{かんせん}感染防止^{さく}策をしたうえで^{あまみ}奄美大島で合宿をした。オンラインだけの知り合いと初めて会ったと喜ばれた。

社会人も同様だ。自宅でリモートワークが続いたり^{いぎょうしゆ}異業種に出向したり、管理職も接し方に困り、人事部も^{さく}策を^{もさく}模索中と聞く。「私とコロナ」という題で自分の経験、悩み、^{しゅちよう}主張を論文に書きコンテストを開いてはどうか。^{じょうし}上司もヒントを得られるかもしれないし、経営者もぜひ読んでほしい。

コロナが落ち着いた今、社長は全国の^{きよてん}拠点^{あんぎや}をリアルに行脚してはどうか。直接声をかければ社員は喜ぶ。オンラインを全面否定しないが、リアルに顔を会わせることの合理性も見直すべきだ。

男性育休が促す経営革新

4月から法改正で、企業は男性従業員に育児休業を取るよう促すことが求められるだろう。しかし日本企業には、男性が育休を取ることに否定的な経営者や管理職が少なくない。

育休を取りたいという男性は多いが、実際に取った男性は少ない。2020年度の民間企業では、12.65%だけだ。また、休みを取ってもたいてい期間が短い。5日未満が3割近くを占めた。上司を説得するのが難しい、育休の後に職場に戻れるか不安に感じる、という声をよく聞く。育休を取らせない、または短くさせようとする職場も多い。

私は3年半前に上の子が生まれてから、育児に取り組んでいる。子育ての大変さと大切さ、そして母親のケアの重要性が実感できるようになった。

出産後1年以内で死亡した女性の死因を調べると、トップは自殺だ。産後うつが関係している。また、夫の家事・育児への貢献が大きいほど、二人目の子が生まれる割合が高いという調査結果もある。男性の育児への参加は、母親の生命や子どもの出生にも関わるのである。

そして見過ごされがちだが、男性育休は企業にとって経営革新のチャンスにもできる。男性育休で先を行く企業では「採用に困らなくなった」「不要な残業が減った」「生産性が上がった」といった効果が報告されている。また「キッズ・ファースト企業」をスローガンにしている積水ハウス社のように、自社のブランディングに活用することもできる。

社員の人生を大切にする企業は、優れた人材をひきつける。業務、マネジメント、コミュニケーションを革新し、休みがきちんと取れて、生産性や創造性の高い企業へと進化していくことを勧めたい。

プラごみ削減 消費者の「共感」が不可欠

プラスチックのごみを減らすために外食産業の果たすべき役割は大きい。スターバックスは2019年から30年までに二酸化炭素（CO2）や廃棄物の排出量を半減させる目標を掲げている。

日本では、21年秋にストローを紙製に切り替えた。これまでもストローが不要なカップの使用や、くり返し使える持ち帰りカップの販売などに取り組んできた。ただ一方的に「マグカップやタンブラーを使ってください」では消費者に伝わらない。重要なのが、消費者からの共感だ。

例えば今年2月、飲み物の表面にいちごのチョコで桜を表現した商品を発売した。そうすると蓋付きの使い捨てカップではなく、模様が見えるマグカップで注文する人が増えた。「おいしい、楽しい、環境にもいい」と消費者に思ってもらい、一緒に環境への取り組みを進める。

19年にはコクヨ社と共同で、ミルクパックを再利用したノートを開発した。環境への取り組みは1社だけではなく協業することも選択肢となる。

なぜ環境への取り組みが大切なのか。スターバックスのビジネスの中心はコーヒー。農産物であるコーヒーを今後も持続的に供給していくためには、環境問題への対応は欠かせない。地域に根ざしたスターバックスの存在意義を考える上でも、持続的な社会への取り組みが必要になる。

消費者の環境への意識も年々高まっている。特に若い人にとっては「正しい行動」が購買の判断基準の一つ。環境に配慮した企業行動は、従業員が働く場所を選ぶ理由にもなっている。環境への取り組みは短期的なコストではなく、中長期的な視点での投資ではないだろうか。

「監視」を「見守り」に転じるには

デジタル技術は監視社会を生み出しているという議論がある。町中の監視カメラやスマートフォンなどのデジタル機器を通じて、国や企業が個人情報を把握し、利用して思想・行動をコントロールするというものだ。

同じようなことが行われていても、「見守り」になるケースもある。たとえばセコムなど民間企業が提供する見守りサービスは、子供や高齢者の所在地を知らせて安心を提供する。また、公共サービスのデジタル化が世界最高水準のデンマークでは、国民の満足度は高い。どちらのケースも企業や国家が個人データを把握している。

この違いを生み出す要因は何か。まず、ユーザーが自らお金を出してサービスを受ける場合は見守りになる。監視対象ではなく顧客だからだ。しかし、これではお金のある人だけの「見守り社会」になる。

市民全体が「見守り社会」に属するためのヒントは、デンマークにある。デンマークは国民の「一般的信頼」、つまり他者一般を信頼する度合いが高い。自分の個人データは国や企業によって悪用されないと人々が信頼しているとも言える。

ある社会心理学者によれば、一般的信頼が高い人は単なるお人よしではなく、他者が信頼できるか判断する能力がむしろ高い。そして、人々に多くの交流の機会が与えられている社会ほど、市民の一般的信頼が高くなるそうだ。他人を見極める能力が鍛えられるからだ。

デンマークの一般的信頼の高さは、社会的弱者を見捨てず機会を与えるという政府の姿勢と、アクティブ・シチズンシップ、つまり能動的に自分の責任で様々な機会を活用する市民の姿勢にあると、筆者は考える。日本でも人々に多くの機会を与えて他者を能動的に信頼する技術を磨くことが、監視社会を見守り社会に転じるカギになるのではないだろうか。

はやく行きたければ一人で進め

「はやく行きたければ一人で進め。遠くまで行きたければみんなで進め」。先日、岸田^{きしだ}さんが所信^{しょしん}表明の演説で言っていた、ことわざである。強い眠気を誘^{さそ}った前任者の阿部^{あべ}さんの棒読みより、岸田さんの演説はまだ聞きやすい。経済的な格差を協^{きょうちよう}調によって乗り越えようと訴^{うった}える、この言葉も印象的だった。

同じことわざを二〇一六年の米^{みんしゅとう}民主党の全国大会でコリー・ブッカー上院議員が引用して話題になったことがある。しかし、そのオリジナルがはっきりしない。ノーベル平和^{しょう}賞のアル・ゴアさんも、気候変動問題への取り組みを訴えるのに引用したことがある。

アフリカのことわざという説がある。たしかに、助け合いながらみんなで進むことを良しとする内容は、西洋の個人主義と異^{こと}なる。アフリカらしい大らかさや包容力も感じるが、現地では聞かないという報告もある。もう一つ有力なのが、英国の詩人キプリングの詩からという説。ただ、内容は「最もはやく到着する人間は一人で行く者である」「遅れる人間を待つのはおろか」と、ことわざの意味とはまるで違う。

今の世の中はキプリングの詩の方になびきやすく、われ先にと進み、遅れる者を見捨ててしまう。そんな風潮^{ふうちよう}の中であって、みんなで進むためにどう説得^{せいさく}し政策^{てんかい}を展開していくのか。岸田さんの旅の荷物は重いだろう。言葉は美しくても、それができなければ、この新政権も遠くまで行けない。

2021年 流行語大賞^{しょう}

「人流^{じんりゅう}」「路上^{ろじょう}飲み」「変異株^{へんい かぶ もくしよく}」「黙食^{もくしょく}」。今年話題となった言葉を選ぶ新語・流行語大賞の候補^{こうほ}が発表された。早いもので、今年ももうそんな時期になったのかと思う。肌寒いはずである。

候補となった三十の言葉をながめると、やはり新型コロナ関連のワードが目立っている。最近の新規^{かんせん}感染者数は、一時に比べて^{げきげん}激減し、胸をなでおろす一方、「変異株」などの言葉を見れば、感染^{かくだい}拡大が続いていたころの緊張^{きんちよう}と不安がよみがえってくる。大賞のトップテンは十二月一日に発表されるそうだ。

一足早く発表された英国のオックスフォード英語辞典が選んだ今年^{しんねん}の言葉もまた、コロナ関連だった。「V A X」。わずか三文字だが、日本人には見慣れぬ言葉だろう。V A C C I N E（ワクチン）のことだそうだ。「ワクチンを打つ」という意味の動詞としても使える。英語^{けいご}圏の新聞の見出しでも、最近^{さいきん}はV A C C I N EよりV A Xの方がよく使われる印象がある。今年になってメディアやSNSなどによく登場するようになり、使用^{ひんどう}頻度は、昨年^{さくねん}の約七十倍だそうだ。ワクチンの是非^{ぜいひ}や効果が口の端^はにのぼりやすい一年^{いちねん}にあって、短く、言いやすい言葉が受けたのだろう。

英国をはじめ、世界には新規感染者が再び増加している国がある。V A Xの効果が薄れてきているという見方もある。くやしいことにその言葉の流行はなお続きそうである。

「ブッシュ・ド・ノエル」

薪^{まき}の形をしたクリスマスケーキを「ブッシュ・ド・ノエル」というのは、よくご存じだろう。ブッシュは木。ノエルはクリスマス。諸説^{しよせつ}あるが、考案したのはパリの菓子店で、一八七九年のことと伝わる。『お菓子の由来物語』(幻冬舎^{げんとうしゃ})に教わった。

しかし、なぜ、薪なのかははっきりしない。キリスト誕生を祝って夜通し、薪を燃^もやしたことに由来するとの説や、檜^{かし}の薪を暖炉^{だんろ}で燃やすと、無病息災^{そくさい}で過ごせる、という北欧^{ほくおう}の伝説と関係があるという説もある。こんな言い伝えもある。貧しい青年が恋人にクリスマスプレゼントを買うことができないので、代わりに薪を贈った。この話から「ブッシュ・ド・ノエル」が生まれたというのである。

高いから、今年はケーキの代わりに薪にするか。冗談^{じょうだん}でもそんなことを口にすれば、楽しみにしている子どもたちから文句が出るだろう。残念ながら、今年のクリスマスケーキは値上がりの傾向にあるそうだ。原油価格の高騰^{こうとう}を受けて、海外から輸送される小麦や砂糖^{さとう}などの原材料費がまず上がっている。それに加えて、ケーキに欠かせないイチゴ。これも原油高でハウス栽培^{さいばい}の暖房費^{だんぼう}が余計にかかり、こちらも値が張^はる。

英国の伝統的なクリスマスケーキといえば、「クリスマスプディング」。材料をかきまぜながら、願い事をするそうだ。あまり面白くもないが、今年は原油市場の安定を願いながら、かきまぜたくもなる。

仲間思いのネズミ

ネズミはどうやら仲間思いらしい。海外での研究によると、仲間のネズミが閉じこめられているのを見れば、救出しようとする。その時にエサを見せた場合でも、仲間の救出を優先する傾向があるようで、何の得がなくても、仲間を救うとは、まるで小さなヒーローである。人間でいう共感力や優しさのようなものが備わっているのか。

人間に対してもネズミが同じ仲間だと思ってくれているわけではないだろうが、その体長七〇センチのネズミは間違いなく大勢の人間を救ってくれた。アフリカオニネズミの「マガワ」が死んだそうだ。八歳。別名は「ヒーロー・ラット（ネズミ）」。内戦時代の地雷が大量に埋められたままのカンボジアで、地雷捜しに貢献した。

訓練によって、爆発物の化学物質をかぎ分けることができた。体重の軽さのおかげで地雷の上を走っても爆発しないそうだ。昨年引退するまでの五年間に、百個を超える地雷や爆発物を見つけたというから、驚く。人間なら四日はかかるテニスコートほどの捜索が、マガワなら三十分。どんなに心強いヒーローだったことだろう。

こうしたネズミは、カンボジアのほかにアンゴラ、モザンビークなどでも活躍していると聞く。人間の争いの後始末をネズミが手伝っている。仲間思いのネズミなら、どうして人が人を傷つける道具を埋めたのかと、クビをかしげながらの作業かもしれない。